午後十一時前のバスターミナルは、帰宅を急ぐ人たちでまだ明るかった。

僕は大きなキャリーケースを預け、三時間ほどで終点へ着く深夜便に乗り込んだ。遠方のイベントへ一人で参加した帰りで、新幹線代を惜しんで選んだ初めての夜行バスだった。

窓側の席へ座った途端、少し後悔した。狭い。しかも通路側の席だけが空いたままで、どんな人が来るのかわからない。手荷物のバッグを膝に置き、落ち着かないまま発車を待った。

（なんで夜行バスにしちゃったんだろう……）

発車間際、背の高い男が乗り込んできた。黒いパーカーに暗い色のズボン。僕が膝のバッグを脇へ寄せた拍子に、座席との隙間へ置いていたペットボトルが落ちかけた。すると長い腕がさっと伸び、床へ落ちる前に受け止めた。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

低く落ち着いた声だった。男はそれ以上何も言わず、僕の隣へ腰を下ろした。

短く整えた暗い茶色の髪と、整った顔立ち。肩幅も広く、ただそこにいるだけなのに存在感があって怖い。

視線が合いそうになるたび、僕は窓の外へ顔を向けた。

（三時間くらいなら、眠っていればすぐだよね……）

それから一時間。窓と前方の仕切りカーテンは閉じられ、その向こうは真っ暗だった。車内が消灯され、周囲の乗客が毛布にくるまって眠り始める。

バスは低いエンジン音を響かせながら、高速道路を走っていた。

疲れていた。イベントで一日中歩き回り、帰りに食事をして、バスターミナルまで重い荷物を運んだ。足の裏が痛い。

体の力が抜けていく。

（眠ってしまいたいけど、寝過ごすのも怖い……目的地に着くまでは起きていよう……）

そう言い聞かせながら、まぶたはどんどん重くなった。毛布を肩まで引き上げ、窓へ額を触れさせる。低いエンジン音がゆっくりと意識を遠ざけていく。

いつの間にか、僕は眠っていた。

ゆらゆら。ゆらゆら。

（もう少しだけ……）

心地よい揺れの中で、いつの間にか隣の男の肩へ頭を預けていた。硬くて温かい。ざらりとしたパーカーの質感が頬に触れる。

このまま眠っていたい。そう思いながら意識が沈んでいると、別の感覚が滑り込んできた。

太もも。

（なに……？♡）

毛布の上から、大きな何かが触れている。眠気の靄の中で、その輪郭がはっきりしてくる。手だ。

男の骨張った大きな手が、毛布越しに僕の太ももへ添えられていた。

それだけならまだよかった。

（手……？♡）

でも、その手がじわりと動き始めた。毛布の端を確かめるように、ゆっくりと。触れ方は柔らかいのに、動きには迷いがなかった。

眠気が急速に薄れていく。

これは夢じゃない。

（……ば、バレたらやばい……っ♡）

眠ったふりのまま、僕は微動だにしなかった。心臓が一気に跳ね上がる。体を固くして、呼吸だけは

意識してゆっくりと繰り返した。
　寝ているように見せれば大丈夫。そのうち手を引くはずだ。そう思った。

「起きていますね♡」

　耳のすぐそばに、低く落ち着いた声が落ちてきた。

（え……っ！？♡）

　全身の血が引いた。寝たふりが一瞬でバレた。体がびくりと震えてしまう。ゆっくり顔を上げると、男がこちらを見下ろしていた。
　まっすぐな目だった。暗い車内で、その目だけが静かにこちらを捉えている。

「すっ♡ すみません……っ♡ 寄りかかってしまって……っ♡」

　慌てて肩から頭を離す。声が情けなく震える。

「寝たふりで凌ごうとしましたね♡」

　見透かしたように言われ、逃げ場をなくした気分で視線を伏せた。

「ちが……っ♡ 本当に眠って……っ♡」
「最初はそうでしょう♡ でも気づいた後はずっと起きていた♡」

　断言される。反論できない。
　男は毛布の端へそっと手を差し込んだ。

「や……っ♡」

　小声でそう言うのが精いっぱいだった。続けて「触らないでください」と言えばよかった。でも言葉が喉の奥で詰まる。
　怖いと思う人を前にすると、いつもこうだ。声が出ない。体が固まる。

「静かにして♡」

囁きが耳に触れた。

「まだ眠っている乗客がいる♡ 声を上げたらみんなが起きますよ♡」

その通りだと思ってしまった。夜行バスの車内で騒いだら、こちらまで注目されてしまう。それを最初から見透かされている。

窓側には壁があり、通路側には男の体がある。その隙間で、男の手が毛布の中へ入り込んでくる。

「やっ」と口から出そうになった。でも、かすかな吐息しか出なかった。

太もものつけ根へ指先が滑っていく。内側へ。さらに内側へ。

ズボン越しに股間へ触れたところで、男の手が一瞬止まった。あるはずだと思っていた形がないこと

を確かめるように、骨張った指が布地をゆっくりとなぞる。

（気づかれた……っ♡）

　指先が中心のくぼみを探り当てた。偶然ではない。触れてから初めて、僕がカントボーイだと知られたのだ。

　驚いたはずなのに、男は手を引かなかった。むしろズボンのウエストへ指をかけ、ボタンを外してファスナーをわずかに下ろした。

　僕はなるべく自然に見えるよう、太ももに力を入れた。でも男の脚はびくともしない。膝で押されるだけで、足幅を少しずつ広げられてしまう。

　力の差は明らかだった。

（ちがう……っ♡ 開かないで……っ♡ 声を出したら全員が起きちゃう……っ♡）

　焦りが胸に広がる。バスの中で声を上げたら、み

んながこちらを見る。それが怖くて、唇を噛んで堪える。

開いた隙間から手が入り込み、薄い下着越しに指が触れた。

「ひっ……っ♡」

思わず声が漏れた。反対の手で咄嗟に口を押さえる。心臓が激しく跳ねた。

周囲が動かないことを確かめてから、僕はゆっくり手を下ろした。

男の指がぴったりと中心に添えられる。布越しに割れ目をなぞっていく。

（だめっ♡ そこはだめ……っ！♡ なんでそこに……っ♡）

体がこわばる。内側から熱いものが広がってくるのを感じて、余計に焦った。

くちゅっと、かすかな音がした。

（やだっ……！♡ こんな音聞こえちゃったら……っ♡）

冷や汗が出た。膝に置いたバッグのストラップをぎゅっと握り、俯いたままなるべく普通に見えるようにする。

「……ずいぶん濡れていますよ♡」

囁きと一緒に吐息が耳にかかった。肩がびくりと跳ね、耳の奥がじんと熱を持つ。

「ちが……っ♡ これは……っ♡」
「違わない♡」

断言される。
ぴっと、男の指先が一点を見つけた。

「ひっ……！♡」

反射的に脚を閉じようとした。でも男の脚に阻まれたうえ、大きな手で内ももまで押さえられ、動かせない。

（そこ……っ！♡ そこはだめ……っ！♡ クリ……クリに触れてる……っ！♡）

男の親指が下着の上から、小さく固くなったそこを見つけてひと撫でした。それだけで膝がかくりと揺れてしまう。

（気づかれた……っ♡ こんなに勃ってるのばれてる……っ♡ 男なのに……っ♡ 恥ずかしい……っ♡ でも声出しちゃだめっ♡）

唇を固く結び、鼻から細く息を吐く。こみ上げてくるものを喉の奥へ押し込む。ここは夜行バスの中で、まだ他に人がいる。

「ここですか♡」

耳元で囁かれ、その声だけで背筋が震える。同時に、親指が小さな円を描いてそこを転がした。

（ぐりぐり……っ♡ やだっ……っ♡ なんでそこがわかるの……っ！♡）

ぐりっ♡ ぐりっ♡

舌の裏側が痺れるような感覚がある。下腹にじわじわと熱が溜まってくる。

でも親指はやめない。焦らすように、ぐりぐりと転がし続ける。

ぐり♡ ぐり♡ ぐりぐりっ♡

口の端が震える。声が漏れそうになるたびに奥歯をぎゅっと噛んで押さえる。それでも鼻から細い吐息がこぼれ出てしまう。

「……っ♡ ふ……っ♡」

漏れてしまった。ほんのかすかな、吐息のような声。慌てて口を覆う。